



地域がはぐくんだ、ふれあいのつながりを訪ねて

# 愛ランドまーい

人と人のつながりがより身近な地域には、途切れることのない人の輪があり、脈々と継がれる絆があります。共同体意識に根ざした独特の活動を展開する各字を訪ねました。

## 子供たちの

## 綱引きで幕開け

旧暦六月二十五日の夜、恩納村字谷茶では、集落内を東西に走る道路で、綱引きが行われます。

その昔、谷茶には二隻の村船があり、それを管理する二つのムートウヤー（本家）を中心に、シンダカリ（後村渠）とメンダカリ（前村渠）の二つの組が作られました。その両者が東西に別れ綱を引き合い、航海安全と村人の健康を祈願したと言われていました。

この谷茶の綱引きは、琉球王朝時代から続く年中行事で、沖繩戦で中断されましたが、戦後まもなく再開され、今に引き継がれています。

綱引きの支度は男たちが中心ですが、女性陣が言葉でかけ合い太鼓を打ち鳴らします。



女性陣が言葉でかけ合い太鼓を打ち鳴らします。

谷茶の綱引きは、前日のグナア（小）綱引きと呼ばれる子供たちによる綱引きで幕開けします。その後、翌日の午前中にウタキ（御嶽）の清掃、夕方にウタキでミキウグワンを済ませると、いよいよ綱引きです。

双方の綱の先端に作られた輪に、カナシ棒（かんぬき棒）が通されるやいなや、引き合いが始まります。指笛やホラ貝、太鼓など鳴り物の音もにぎやかなこと。勝負がついても、興奮は冷めず、女性は言葉でかけ合い、



# 航海安全と村人の健康を祈願し、綱を引く

## 恩納村字谷茶の綱引き

カナシ棒が通されると、綱引きの始まりです。



現在、綱引きの綱はロープです。



ミキウグワンが行われる 御嶽

男性は背中で激しくもみあいます。あたりの闇が増すとともに、人々の心は一つとなり、祭りは絶頂を迎えます。そこには昔ながらの共同体の絆が生きています。

## 「谷茶前節」発祥の地

恩納村の中央部にあり、南は金武町に接し、北は東シナ海に面します。海岸の砂地に谷茶の集落があります。

耕地面積が少なく、かつては沿岸漁業が盛んでした。

集落前の砂浜は、沖繩を代表する民謡の「二つ、谷茶前節」で知られる「谷茶前節の浜」です。

「谷茶前節」の発祥は、今から一六〇年ほど前にさかのぼります。首里王府の役人の接待の席で、谷茶の人々は、何か芸能を演じなければならなくなりましたが、これといった芸能を持たなかったため、窮余の策として、日ごろの生活があるがままに伝えようと唄にしました。軽快なリズムに合わせ、漁や魚売りの様子が、素直に歌われています。



世界の頭脳が集う丘  
沖縄科学技術大学院大学  
2012年までに開学を目指す沖縄科学技術大学院大学は沖縄の発展、世界の科学技術の発展に寄与すると期待されています。



琉歌の里  
恩納村を代表する女流歌人といえば「恩納ナビー」。恩納村の豊かな自然を背景に、多くのすぐれた琉歌を生み出しました。



海・山の幸  
別名グリーンキャビアとも言われる海ブドウをはじめ、モズクなどの養殖も年々成果を上げています。また近年、熱帯果樹、野菜類なども栽培されています。



国指定史跡  
国頭方西海道  
約400年前の琉球王朝時代に作られた当時の主要道路にあたり、首里を起点に浦添、読谷村喜名を通り名護以北に向かう沖縄本島西側の道で、多くの遺跡が残る歴史道です。

恩納村の概要  
恩納村は沖縄本島のほぼ中央部西海岸側に位置し、山や川、海などの変化に富んだ自然豊かな村です。のどかな村に、大きな転機が訪れたのは、本土復帰後開催された沖縄国際海洋博覧会以降。サンゴ礁の広がる美しい海岸線が観光資源として注目され、大型のリゾートホテルが競って並び建つようになりました。

# 青と緑の躍動するむら、恩納村

四十キロにも及ぶ恩納村の海岸線は、その美しい自然条件から全域が沖縄海岸国定公園に指定され、その優れた自然環境を活かし、国内外から多くの観光客が訪れる日本でも有数のリゾート地に発展しています。また、観光と結びついた工芸産業、商業、サービス業などが盛んになり、新しい村づくりが着々とすすんでいます。